

警察職員による 被害者支援手記

警 察 庁
犯罪被害者支援室

平成23年3月

目 次

8年の歳月を隔てようやく	1
警察署勤務 巡査部長 女性	
『交通安全への祈り』	3
警察署勤務 巡査長 女性	
小さな学習机と大きな第一歩	6
警察本部勤務 警部補 男性	
『彼女の戦友であること』	8
警察署勤務 巡査 女性	
消えた笑顔に輝きを取り戻すために	11
警察署勤務 警部補 男性	
「被害者のやさしさ」	13
警察本部勤務 警部補 男性	
被害者の母	16
警察本部勤務 警部補 女性	
初めての被害者支援	20
警察署勤務 巡査長 女性	

手記の編集に当たりましては、被害者の方又はご遺族のご了承をいただいています。

8年の歳月を隔てようやく

警察署勤務 巡査部長 女性

私がA子と初めて会ったのは、遡ること8年前、B署の強行犯捜査係で勤務していた当時のことでした。

B署を訪れた彼女は、どこか虚ろで精気を奪われた感じで、帽子を目深にかぶり目には眼帯をしていました。彼女を見たとき私は直感的に女性特有の被害と察しました。

帽子を脱ぎ、眼帯を外した彼女の顔は、お岩さんのように腫れあがっていました。一瞬、私は言葉につまりましたが、動揺していることを、彼女に悟られないよう注意しながら被害の状況を聴取しました。

彼女は落ち着いた口調で、ポツリと「レイプされました。」と話し出しました。精神的なショック症状からなのか、ほとんど無感覚な様子で強姦の被害状況を淡々と述べたのでした。

私は、一見冷静に見える彼女に一抹の不安を覚えましたが、とにかく、一刻も早い怪我の手当と婦人科受診のため彼女に付き添って病院に急行しました。

婦人科では、患部の消毒、性感染症の検査等の措置や緊急避妊薬の処方その他に、証拠資料を採取する必要があることを説明し、受診してもらいました。

事件の被害者として婦人科を受診するのは、女性には大変辛いことです。同じ女性として、「警察の捜査に協力してください。」とお願いすることに、胸が締め付けられる思いでした。

二次的な被害を与えないように細心の注意を払いながら、事件の真相を事細かく聴取していくうちに、私は彼女のために、絶対に犯人を逮捕して、無念な気持ちを晴らしてあげなければならないと心に誓いました。そして心の中で、「ごめんね。」と謝りながら事情聴取を続けました。

勇気を出して私に打ち明けてくれた彼女のためにも、絶対に犯人を逮捕するんだ、そのため彼女と一緒に闘うんだ、それが私の使命だと決意しました。

刑事課全員が、被疑者逮捕の執念をもって、必死の捜査を連日にわたって続けました。刑事達の思いに呼応するかのように、彼女も捜査に協力してくれました。しかし、被疑者に直結する有力情報も得られないまま数箇月が経過しました。

その後、私は配置換えとなりB署を離れることになりました。

未検挙のまま転勤することは心残りでしたが、犯人逮捕の時まで、彼女の気持ちが切れないで欲しい、その時まで彼女の心の支えになってあげたいと思い、転勤後も何度か彼女に連絡し、様子を見守り続けていました。

転勤後、3年を過ぎようとした時、彼女から連絡をもらいました。

「お久しぶりです。犯人が捕まると、警察から連絡がありました。でも、これからが大変なのかもしれません。正直また警察に足を運ぶことが、憂鬱でなりません。」

彼女からの連絡はとても嬉しかったのですが、彼女にとってはまた事件の苦

痛と恐怖を思い出すことになるのではないかと、事件の捜査を通じ、新たに心の傷を負うのではないかと彼女の心中を思いやるばかりでした。転勤した私は事件に携われませんが、彼女とために連絡を取り、心の支えになって陰から応援することにしました。

そして、事件発生から8年後、彼女から連絡がありました。

犯人の男には、彼女の事件を含め同種事件の余罪が多数あり、裁判ではかなり重い懲役の判決になったということでした。

彼女にとって最後の壁となったのは、裁判が判決までに1年半ほどかかったということでした。最後の壁は大きかったはずですが、乗り越えた彼女の明るい声を聞いて安心しました。

「事件のことは今も忘れることはできないけど、これでようやく心も晴れてすべては過去へ流せそうです。本当に乗り越えて良かったです。」

8年の時を経て被害者の笑顔を見た時、自分のやってきた仕事が報われた充実感を感じると同時に、「最後まで協力してくれてありがとう。」と彼女の勇気に感謝しました。

彼女からの手紙

お元気ですか。裁判が一段落しました。犯人が懲役何年かは実は私にとって重要ではないのです。重い刑で罰せられるに越したことはないのですが、犯人があの日、「警察に言ってもお前が恥をかかされた。」と言った捨てぜりふが忘れられなくて、少なくともそう言ったことを後悔させたかったです。反省なんてする人間ではないだろうけど、私が勝利を勝ち取った訳だから、それだけで満足なんです。あの日、貴女に出会っていなかったら、逃げていたかも知れません。支えてくださったこと感謝します。本当に乗り越えてよかった。

被害者支援は、一言で言えるほど簡単なものではありません。

被害者の心の不安を取り除き、事件に立ち向かう被害者の後ろ盾となって支えるのが役目だと思います。

“事件ごと闇に葬ってしまいたい”、そんな心境の被害者の勇気を奮い立たせ、事件に立ち向かわせ、その結果下される判決が、果たして被害者の苦痛に相応しい量刑なのか、実際の判決結果を見て考えることもあります。

被害者が一番望むことが厳罰であるならば、厳罰を科すために私達ができることをするだけですが、被害者が勝利を勝ち取るためには、警察や検察そして、法廷で被害の詳細を明らかにすることも必要となり、厳罰を科すための壁は何層にもなって被害者の目の前に立ちはだかるのです。

警察や検察などの捜査に、羞恥心に耐えながら、信じて付いてきてくれた被害者の期待に応えるためにも、今後も広く性犯罪被害者の実態について世の中の人の理解を求め、よりよい解決の一步となるよう、司法との橋渡しとなるべくまい進して行きたいと考えています。

『交通安全への祈り』

警察署勤務 巡査長 女性

「横断歩道あり 歩行者に注意」

道路脇に立てられた2枚の注意標識。LEDで夜間も光るこの標識には、ある遺族の、ドライバーへの祈りが込められている。

交通機動隊で白バイに乗り、取締りに専従していた私だったが、3年前の異動で交通課事故係に配属となり、交通違反者と接する日々から、交通事故の当事者と接する日々へと変わった。

毎日発生する人身事故の大半は軽傷事故であるが、時には重傷事故、そして大変残念なことに尊い人間の命が奪われる死亡事故が起こる。

事故係に入って半年ほどたったある日の当直の夜、1本の110番が入った。

「車と自転車による交通事故、自転車の男性については意識不明の模様。」

数時間後、自転車の男性は亡くなった。まだ40歳だった。

初七日が明け、ある程度落ち着いた頃、死者と同居していた母親から遺族調書を作成することとなった。

被害者支援要員に指定されている私は、被害者への接し方、気の配り方については教養を受けている。交通警察において、死亡事故の遺族対策は被害者支援対象事件であり、従って調書作成への協力を依頼する際も、お悔やみの言葉を述べ、母親の身体を気遣い、調書作成の場所は遺族の意に沿った。当日は早目に取調室へ向かい、部屋を綺麗にし、お茶を用意した。後は遺族を迎えるだけ。耳が遠く、高齢の母親には急きょ嫁ぎ先から戻った娘さんも付き添ってくるようになっていた。約束の時間、遺族2人が乗る車が見え、私は外に出て出迎えた。「こんにちは。お忙しいところ来ていただいてすみません。どうぞこちらへ。」2人は微笑んで頷いた。

部屋へ通し、改めて自分の名前を名乗り、遺族調書を作成する目的、そして調書作成には数時間かかることを説明した。

母親の横に娘さんが座り、調書を作成し始めた。死者がどこで生まれ、どんな青春時代を過ごし、どんな仕事をしてきたのか……。

最初は慣れない警察の中で緊張気味だった母親も、少し慣れてきたのか娘さんと一緒になって失った息子さんのことを話し始めた。

40年を生きた死者との人生の思い出は多く、次々といろんなエピソードが出てきた。慣れない遺族調書を必死にまとめ、できあがったところで2人に読み聞かせた。

死者との思い出、失ってどんな気持ちで今生活をしているのか、その件になったとき、娘さんは涙を流し始めた。母親は神妙な顔で聞いていた。私はもらい泣きしそうになるのをこらえながら、最後まで読み、そして尋ねた。「悲しい気持ちにさせてすみません。何か違う点、足りない点などはありませんか。」娘さんは大粒の涙を流しながら答えた。「何も言うことはありません。こんなにも母の気持ちを上手にまとめてくださって、驚きました。」母も頷き、

「ありがとうございます。」と微笑んだ。私はほっとし、長時間の協力のお礼を述べ、玄関まで2人を送った。もう会うことはないだろう。今まで同様、数回の電話連絡をするだけだ。私は2人に頭を下げながらそんな風に考えていた。

それから何日かしたころ、娘さんから事故の状況について聞きたいことがあるとの連絡があり、私の相勤者が警察署の取調室で直接会って話を聞いた。30分ほどの話を終え廊下へ出た娘さんを見送ろうと追いかけて、後ろから声を掛けると振り向いた彼女は泣いていた。突然の涙に驚き理由を尋ねると彼女は「警察の方は事故の遺族に何も教えてくれないんですね。」とハンカチで目をぬぐっていた。詳細は分からないが、とにかく説明した。「今回の事件はまだ捜査中なので、あなたの全ての質問に答えることができなかったかもしれない。それについては申し訳なく思いますが、ご理解をお願いします。ただ、話せることは話しますし、できることは協力します。いろいろ大変でしょうけど頑張ってください。」じっと私を見つめていた彼女の涙はとまり、そして一言、「また電話をしてもいいですか。さんに。」

それから3度ほど電話があった。「相手の保険屋が兄も悪いと言う。」「相手の人がカーナビを見ていたと聞いたが本当なのか。」「弁護士を頼んだ。高齢の両親には荷が重いので私が連絡を取っている。」

電話越しに、一人でなんとかしなければと気負っている姿が見え、このままでは参ってしまうかもしれないと感じた私は、「毎日いろいろな手続きで大変ですね。事件のことや示談のことは弁護士や保険屋に任せておけばいいと思いますよ。あまり一人で思い詰めるとあなたが参ってしまうから。」被害者支援うんぬんを考へてではなく素直に彼女を気遣って出た言葉だった。

私は時々事件の捜査状況を連絡し、署名の必要な書類については高齢な母親を気遣い自宅へ出向き、近況も尋ねた。

3度目に自宅へ赴くと、以前より元気な笑顔を見せる娘さんが「お久しぶりです。わざわざ来てもらってすみません。」と出迎えてくれた。ところが母親の姿が見えない。2度目の私の訪問の翌日におばあさんが病気で亡くなり、父親が脳梗塞で倒れ、母親は心労と風邪で寝込んでいるという。あまりの不幸の連続に驚き、私は言葉を失った。逆に娘さんは、私の近況を聞きながら、仕事をし過ぎて身体を壊さないようにと気遣ってくれた。以前より元気になった彼女にほっとしながらも少し悲しい気持ちで自宅を後にした。

被疑者の処罰も決まりその数箇月後、出勤した私の机の上に伝言メモが貼り付けてあった。「さんから電話あり。連絡が欲しいとのこと。」どうしたのだろうか。また困っているのか、示談で揉めているのか。思案しながら電話をした。久しぶりに聞く娘さんの声はしっかりしており、私の近況を尋ねてくるが、その後彼女が口にした本当の用件は、全く予想していないことだった。

「寄付をしたい。」

「さんを始め、警察の方にはお世話になった。兄のように交通事故で命を失う人が出ないよう両親のお金を役立てて欲しい。どこに振り込めばいいのか、何に使えばいいのか、分からないから教えて欲しい。」という電話であり、

上司や遺族と相談した結果、地区の交通安全協会に寄付することとなった。

寄付は、警察署で受け取ることになったが、物々しい警察署の室内で年配の警察幹部に囲まれ、2人は少し緊張気味に見えた。

寄付をするに至った理由を、娘さんは母親の手を握りながら説明していた。「・・・最後に、是非、皆さんの前で言いたいことがあります。」そう言うなり横に座る私のほうに顔を向け微笑むと、「ここにいる さんに、私たち家族はとても感謝しています。」あまりに突然のことで、私はあっけにとられて娘さんの顔を見た。「事故の後、分からないことばかりで、警察の方にはいろいろ無理なことを言ったり、質問したりしてご迷惑を掛けましたが、 さんは他の警察の方と違い、私達に親切に対応してくれました。一緒になって真剣に私達のことを考えてくれ、私の警察への不満にも耳を傾けて、説明してくれたのです。こんなに優しく、聡明で、一生懸命な警察官はいないと思います。何度も家に来たり電話を掛けたりと気に掛けてくれ、私達家族にとっては大きな支えでした。」これまでに経験したことのない、他人から自分への賞賛の嵐。しかもそれを上司が聞いている。私はただただ恥ずかしく正直退席したい心境であった。

今回、遺族が寄付を考えるまで感謝をしてくれたのは、たまたま感情豊かな人だったからなのだと私は上司に説明した。特別なことは何もしていない。みんなと同じことをやっただけだと。しかし、上司は、「それは違う。 さんが当たり前と思う遺族への気遣いは、場慣れしたり、男性だったりするとなかなか持てないもの。今回のことを当たり前だと思ってやった さんはすごい。」またも褒められてくすぐったい気持ちになった。

謙遜したわけではない。本当に何か特別なことをしたつもりはなかったのだ。ただ、なぜ感謝してもらえたのか、自分が何をしてきたのかを振り返ると、一つの答が見えた。

遺族が私に感謝したのは、迎えに行ったことや、気遣った言葉ではなく、私が自然に遺族を思って行動し、遺族を思って自分の言葉で一生懸命話した言葉だ。教科書とおりのことや先輩の受け売りでなく、自分が様々な状況において、何とかしてあげたいと思ってすることが、遺族の気持ちを穏やかにさせたのだと思う。

被害者支援の教養を受け、先輩方の経験談を聞くことは、当然に必要なことである。ただ、それは基本に過ぎない。現実に被害者の支援をする際は、とにかく自分自身が一人の人間として相手を気遣うことが大切。相手の悲しみを癒すためには、楽になるためには、安心させるためには何をしたらよいのか。それを考え続けることだと学んだ。

「横断歩道あり 歩行者に注意」一人の命が失われた事故現場に立つ2枚の注意標識。

これを見ると、私に被害者支援のあり方を考えさせてくれた事故を思い出す。

小さな学習機と大きな第一歩

警察本部勤務 警部補 男性

「これでA子が新しい生活のスタートを切ることができます。小さな学習機ですが、大きな第一歩を踏み出すことができます。」

これは、家族を犯罪被害で亡くし、わずか8歳で突然ひとりぼっちとなったA子の祖父母からの、涙ながらにも力強い言葉であった。

私たちが祖父母の要望に基づき、A子が使っていた小さな学習機を、祖父母の家に運び終えたときのことである。私たちの支援は、小さな学習機を運んだだけである。

A子が小学校に行っている間、自宅で家族が殺害された。家に帰ると家族が無惨な姿になっている。何故なのかを全く理解できないが、最愛の家族を亡くしたことをはっきりと認識しているA子。そこには、祖母にしがみつき、泣いているA子の姿があった。

被害者支援担当者として遺族の支援に駆けつけた私は、祖父母から「私たちも辛い、でも、この子が悲しんでいる姿を見ている方がもっと辛い。自分たちはどんなに犠牲になってもいい。この子が少しでも早く、元の生活に近い状態に戻れるよう。ただそれだけでいい。」との言葉を受けた。

祖父母は、「現場検証のため、当分、家には入れない。明日からのA子の学校はどうすればいいのか。着替えはどうしようか。私たちがA子を引き取るとなると転校しなくてはいいませんが、A子は『転校なんかしたくない。お友達と一緒にいい。』と泣き叫んでいるのです。どうしたらいいのか。助けて欲しい。」とA子のこと頭が一杯の様子であった。私は、祖父母の思いに胸が詰まりながらも、「A子の心の傷はあまりにも深い。どのような支援をすれば、A子を少しでも元に近い生活に戻してあげることができるのか。」と答えが見つからぬまま迷い、悩んでいた。

犯罪被害者等基本法の中には、「犯罪被害者等のための施策」の定義として、「再び平穏な生活を営むことができるための支援」と書かれている。「再び平穏な生活」とは一体どういうことなのか。具体的にどのような支援をすればいいのか。自分たちの行っている支援がこれに当てはまっているのか。これまでに何度も自問自答しながら、言葉では理解できるが、体感することができないままだった。今回もそうであった。

そんな中、祖父母より「A子は私達の家で育てます。A子も転校して新しい友達を作ると言ってくれました。ところで、現場保存中のため、被害現場であるA子の家から物を持ち出せないとは分かっていますが、A子の学習機だけでも持ち出せないでしょうか。」との要望が寄せられた。捜査側で調整をもらい、翌日、持ち出すことが可能となった。そして、この学習機の搬送を我ら被害者支援担当が行うこととなったのである。祖父は「運送業者のようなことまでさせて申し訳ない。」と恐縮していた。当初、私も、「学習機」を単なる物体として物理的に搬送しようとしていただけに過ぎなかった。

しかし、祖父母の「A子の学習機を運んで欲しい。」という言葉の中に込められている思いを聞き取った私は、「これから行く、学習機を運ぶという支援は、まさに、『再び平穏な生活を営むことができるための支援』に繋がるものである」とはっきりと認識することができたのであった。

その思い、それは「A子には少しでも早く、平穏だったころの元の生活に戻って欲しい。いつも大切にし、毎日座り、使い慣れた学用品などが一杯に詰まった学習機に座らせてあげることで、少しでも元の生活に戻れるはずだ。そのためには、どうしてもこの学習機がA子に必要なのだ。」という祖父母の強い思いであったのだ。

ここで、私の支援に対する気持ちは切り替わった。「この学習機にはA子に対する祖父母の深い愛情が込められている。私が運ぼうとしているのは、学習機という形をした祖父母の大切な思いである。それは、まさにA子が再び平穏な生活を営むことができるために非常に重要なものである。だから丁寧に、そして心して無事に送り届けてやらなければならぬ。事件発生当初より遺族と接し、様々な支援を行う警察しか知ることのできないこの祖父母の思い。だから、たかが機の搬送ではあるが、されど警察にしかできない支援である。」そう強く思い、仲間の支援担当者と学習機を搬送した。

大きなパネルバン車の中に積み込まれた小さな学習機は、無事、祖父母宅に到着した。そこには、学習機の到着を待ちに待っていた祖父母の姿があった。「こっちは、ここです。この場所に置いて下さい。」との祖父の合図に従い、祖父母と一緒にこの学習機を運んだ。

学習機がようやく部屋に設置されたとき、祖父母は、涙ながらも力強く、そして何とも言えぬ安堵感が漂ったような表情を見せながら、「これでA子が新しい生活のスタートを切ることができます。小さな学習機ですが、大きな第一歩を踏み出すことができました。この机を見ることで、私たちも『さあ、これからA子のためにがんばるぞ!』という元気が湧いてきました。」と言った。

被害者支援の現場では、困難な壁にぶち当たることが多い。支援をする警察官自身が悩み、苦しみ、困惑することも多々あり、支援の真の目的を見失いがちになることもある。現場で混乱する被害者や遺族などの気持ち、思いをうまく理解できず、悔しい思いをすることもある。

しかし、どんなに困難であっても、被害者等の要望にはどのような思いが込められているのかをよく聞き出し、その思いをよく理解した上での支援であれば、たとえその支援が小さくても、わずかであっても、それが被害者等にとって再び平穏な生活を営むための第一歩につながるのではなからうか。我々警察の行う被害者支援は、この第一歩につなげるために重要なものであるとの信念を持たなくてはならない。今回の支援で私はこのことを学んだ。

『彼女の戦友であること』

警察署勤務 巡査 女性

「性犯罪事件」の被害者に接触するとき、まず聞かなければいけないこと、しなくてはいけないことは多々あって、その手続は何度も教養を受け、経験を経るごとに学んでいった。

しかし、私はどんな現場に臨場する時も、初めて性犯罪事件に臨場する時のような気持ちになる。

被害者に会って、この目でその姿を見て、声を聞くまでは先入観を持たないよう真剣に話を聞き、冷静に聴取しようと心掛けている。

ある雨が降る夜、その事件は起こった。

現場に着くと、既に多くの警察官と救急隊が詰めかけていて、私はその人混みをかき分けて中に入った。

そこには、怪我をした痛みを訴えることもせず、ただただ放心状態でガタガタと震える女性がいた。

救急隊の問いかけにも答えない彼女は、ぼうぜんとしたまま宙を見つめている。

いつもなら自分の名を名乗り、話を聞き始める私は、この時、すかさず彼女のことを抱きしめてしまった。

「よく頑張った。もう大丈夫、もう大丈夫。」

そう声をかけ、雨にぬれた小さい身体を何度もさすった。

すると、彼女は突然目を覚ましたかのようにゆっくり目線を私に合わせると、その途端、せきを切ったかのように

「ウワァ〜ッ！」

と泣き叫び、私に抱きついてきた。

何度言ったか分からないほど、私はただひたすら

「よく頑張ったね。もう大丈夫、もう大丈夫だよ。」

と声をかけ続けた。

正直、この時の私は、捜査員としては間違っていたのかもしれない。性犯罪事件の被害者から何を聴取し、何を採取すべきか、被害者着衣をどう扱うべきかは承知している。にも関わらず、私はその時、彼女を抱きしめてしまった。

雨に濡れてガタガタ震え、自分がひどい怪我を負い、しかし、その痛みが気が付かないほどのショックを受け、目線も合わない放心状態の彼女を見て、早く彼女の気持ちを取り戻さなければ壊れてしまうと感じた。

この時の自分の行動は、今でも良かったのか悪かったのか、正しかったのか正しくなかったのか分からない。でも、もしまた同じことが起きたとしたら、私はやっぱり同じことをするかもしれない。

それは、その時になってみないとわからないけど、あの時、とにかく彼女の気持ちを引き戻すことが一番だった。

後の彼女は、元々芯に強さを持つ女性だったのか笑顔を取り戻し、勇気をもって事情聴取や見分等捜査に積極的に協力してくれた。

そして、この事件は、後に、無事被疑者が逮捕され、確固たる証拠と共に起訴された。

「裁判員裁判になる。」

このことを検事の口から聞いたとき、法廷に立つ彼女の姿が真っ先に浮かんだ。

彼女に会いに行き、そのことを注意深く慎重に伝えたと、彼女は、

「テレビのニュースで見て、裁判員裁判というものは知っています。でも、まさか、自分の身に起こるなんて思っても見なかった。」

戸惑う様子を隠すように、彼女は弱々しく笑い、

「でも、犯人を許せないから大丈夫です。頑張ります。」

と答えた。犯人が逮捕される以前、この事件には多くの捜査員が

「絶対に捕まえる」

という強い意志を持って、連日深夜にまで及ぶ捜査に当たっていた。

私も、絶対にこの被疑者は捕まると信じ、心して彼女の供述調書を作成した。

性犯罪事件の被害者から供述調書を作成する時、

「彼女が検察官・裁判官の前で話をする時、素直にそのまま話ができるように」

ということを意識している。

「目の前の彼女なら、事件のことをどう話をするか」

「作成した供述調書がすんなりと彼女の代弁になるように」

を考えている。

今回の事件は、それを殊更に意識した事件だった。

裁判になった時、私ができることはもう何もない。

だからこそ、そこまでは、きちんと彼女の手を引っ張っていける捜査員でありたい。

そして、裁判になったら、一人法廷に立つ彼女の背中をきちんと押してあげられる、そして、真実を正確に伝えられるような供述調書を作成しようと思った。

それが、自分が彼女にできる捜査員としての誠意であり、励ましたと思った。

犯人が逮捕された時のこと、透視鏡越しの面通しを実施した。

彼女は不安そうに、でも強い意思をもって、私の手を強く握ると、そのまま取調室の前まで行き確認をした。

それからだった。

彼女は夢を見るようになった。

それは、被害に遭っている時のことではなく、一般的に「怖い」と思われるものが夢に出てくるようになったと話をした。

そして、その遠くに犯人のような男が立っていると話した。

私は、その言葉を聞いて、一度は立ち直りかけた彼女が、また事件当時のショックを思い出してしまったと思い正直焦った。

すると、彼女は私をふと見て、突然クスクスと笑い出し、

「でも、そういう夢を見た最後に、なぜか必ず さん（筆者）が出てくるんです。それで安心して起きるんです。」

と話をした。

この時、私は、県警察の犯罪被害カウンセラーチームにカウンセリングを依頼していたのだが、

「怖いままで夢が終わったら、それはカウンセリングが必要な症状かもしれない。でも、いい終わり方をしているのであれば、心が回復しようとしているから、様子を見ていきましょう。」

と教えてもらい、彼女も安心した表情を浮かべた。

「強い」と思った。

心のどこかで、やはり性犯罪事件の被害者には、もう傷つかないように守らなければという意識が強く働くことは否めない。

しかし、彼女達が傷つくことばかりに目を向けるのではなく、その内にある「強さ」、「悔しさ」、「怒り」を引き出してくるのも捜査員としての責務なのかもしれない。

彼女達が安心して眠れ、安心して外を歩くことが出来るようになる一番の薬は「犯人検挙」だ。

それを、彼女から改めて教えてもらい、痛感したそんな事件だった。

後になって、彼女は事件当日、私に会った時の印象を話した。

「抱きしめてもらった時、ふと顔をあげたら目の前に親友がいると思ったんです。いるわけないのに、来てくれたと思って安心しました。さん、本当によく似ているんです。」

と言って笑っていた。私も思わず笑ってしまった。

被害者と捜査員の関係。

彼女には、いつか私の事も忘れてしまうくらい、被害に遭ったことを消化して、元通りの生活に戻って行ってほしいと思う。

親友にはなれない。なっちはいけないのだろう。

でも、彼女達にとって、その時を共に乗り越え、手を引っ張り、背中を押し、てやれる「戦友になりたい」と思っている。

消えた笑顔に輝きを取り戻すために

警察署勤務 警部補 男性

残暑厳しい夏の日の夕暮れ、悲しく凄惨な事件が発生した。

会社勤めを終えたAさん（男性）は、いつものように車を運転して家路についた。しかし、彼は愛する家族が待つ我が家にたどり着くことはなかった。我が家からは程遠い閑静な住宅街で彼は何者かに殺害されたのである。

当署に強盗殺人事件特別捜査本部が開設される一方で、被害者支援要員である私にとって、辛く悲しい被害者支援活動が始まった。

事件発生の翌日、私は奥さん以外のご遺族とはお会いすることができた。署内の被害者用相談室で、捜査員から捜査状況の説明を受けていた彼らは、頷きながら聞き入っていたが、次第に落胆し憔悴^{しやうすい}していき、傍らで見ていた私も暗く沈んだ気持ちになっていった。

説明を終えた捜査員が退室し、部屋に残った私は、『被害者支援要員としてこれからやるべきことをご遺族に伝えなくては。』という職責を思い出し、彼らに対して、「私は捜査を担当する警察官ではありません。このような悲しいできごとに遭われて、お困りのことが数多く出てくることと思います。できる限りのお手伝いをさせていただきますので、一緒に乗り越えていきましょう。」と自己紹介をした。すると、ご遺族の一人が突然、「まだ信じられない、どうして...。」と泣き崩れた。私は、「辛いですね。」とこみ上げてくる涙をこらえるのが精一杯であったが、彼らが私を受け入れてくれた瞬間でもあった。その後、被害者のご遺体は家族が待つ我が家へと静かに帰っていった。

その後、Aさんの奥さんとは通夜式会場で初めてお会いすることとなったが、その毅然とした態度と姿に私は驚くと同時に痛ましさを感じた。会場では、報道関係者による取材活動が懸念されたが、喪主である奥さんは取材の自粛を申し入れるなど、事前に私が助言しておいたことを気丈にきちんとこなしてくれたのである。時は慌ただしく過ぎたが、大きな混乱もなく、告別式を終えることができ、支援活動の第一歩を無事に務めることができた。

告別式から二週間ほどたったころ、私は同僚のS巡査部長を伴って奥さんを訪ねた。彼女は亡き夫の身辺整理などに追われているといった近況や子どものことが心配だという心情を語ってくれた。しかし、「こうして日にちが過ぎていくことに不安を覚えます。犯人は捕まるんでしょうか。」と涙を浮かべながら語り、それまでに見た彼女とは別人のような『か弱さ』を見せた。犯人への憎しみに加え、犯人が捕まらない不安と不満が入り交じった心情も見え隠れしていた。帰り際に奥さんは、「今度はいい話（犯人逮捕）を持ってきてください。」と我々に宿題を与えるように話した。

署へ帰る車中で私とその宿題に途方に暮れていると、S巡査部長は、「係長、やれることをやろうよ。」と励ましてくれた。

事件発生からしばらくして、私の元にご遺族の一人から電話があった。「家族は『現場に行ってみたい。』と言っているのに、なかなか決心がつかないみ

たいなんです。私から『現場に行こう。』と誘うタイミングが難しくて。」という相談であった。私は、「私からこの話をしてみます。」と約束し、すぐに奥さんに電話を入れてみると、「もしよければ、今から来ていただけますか。」とのことであったので、S 巡査部長と共に訪問することとした。

奥さんは笑顔で我々を迎えてくれたが、私は奥さんからの宿題が気にかかる訪問であっただけに、その笑顔が重くのしかかっていた。ご焼香させていただいた後に奥さんに向き直ると、奥さんは、「空気みたいな存在だったんですけどね、いなくなってしまうと寂しくて...。」とポツリと語り始めた。ご主人との生活について、時折、笑顔を交えながら語ってくれた。『今しかない。』と私は決心し、「現場、行ってみますか。」と申し向けてみた。

すると彼女は、「本当はすぐにでも現場に行きたかったんです。でも、一人で現場に行くのが怖くて。一緒に行っていただけますか。」と健気に答えてくれた。私の隣でS 巡査部長が涙を流しながら頷いている。私は、「今から行きましょう。」と奥さんを誘った。

そして、私とご遺族は車で現場に向かったが、惨劇の現場となった道路は狭く、駐車場所に困ってしまった。すると、すぐ近くに住む女性が「ここに駐めてください。」と声をかけてくれた。彼女はご遺族を乗せた車であることを察したようだった。悲しい現場への訪問と雨のせいもあって曇りがちだった私の気持ちが、思わぬ形で広がった『被害者支援の輪』で少し晴れやかになった。

奥さんはあるお宅の軒下に供えられた花を見つけ、「このあたりに主人は倒れていたんですね。」とつぶやき、手を合わせたまま動かなくなった。一緒にいたご遺族が「台風が来たらお花が飛んじゃうよね。」と言うと、それまでそのお宅の男性は私たちをいぶかしげに見ていたが、花が風に飛ばされないように紐でしっかりと固定してくれた。ここでもまた『被害者支援の輪』が広がった。

その後、奥さんはその場所までのAさんの足取りを確かめたかったようで、「主人がたどった経路を歩いてもいいですか。」と要望した。すると、現場近くで捜査に当たっていた捜査員が「私が一緒に行きましょう。」と案内役を買って出てくれた。ここでも更に『被害者支援の輪』が広がった。

現場から帰る車中、「行ってよかった。みなさんのおかげです。」と奥さんが安堵の表情を見せた。駐車場を提供してくれた女性、花を固定してくれた男性、Aさんの足取りを案内してくれた捜査員、そしてS 巡査部長と私。被害者とそのご遺族へのそれぞれの想いが大きな『被害者支援の輪』となり、私は本当に嬉しくなった。

「係長、やれることをやろうよ。」というS 巡査部長の励ましの言葉を思い出した。『警察官だから』と構える必要はない。被害者やその遺族のために誰もができることをやってみることが被害者支援のスタート地点であり、ゴール地点でもあることがわかった。我々が先頭に立って『被害者支援の輪』を広げていこう、消えた笑顔に輝きを取り戻すために。

「被害者のやさしさ」

警察本部勤務 警部補 男性

「あなたでもいいです。」

私が被害者支援を担当した、強制わいせつ致傷事件の被害者となった女性から聞いた最初の言葉だ。

その事件は女性の自宅で発生した。

自宅は、閑静な住宅街にあり、犯人は、たまたま自宅に帰る被害者の姿を見かけて卑劣な犯行を思いつき、自宅に押し入ったのだった。

そして、犯人は、縛り付けた被害者を口封じのため、凶器で重傷を負わせて逃走していた。

幸いにも被害者は一命を取り留め、被疑者も早期に逮捕されたが、その事件の被害者担当に私が指定されたのだ。

被害者は大きな傷を負わされている。心の傷は身体以上のものかもしれない。しかも、年齢は私と余り変わらない。

「男の捜査員でいいのか。」「女性の捜査員の方がいいだろう。」いや、本音を言えば「被害者支援なんてやったことないし、自分には荷が重い。やりたくない。」そんなことを考えながら、被害者が入院中の病院に向かった。

病室のベッドに横になっている被害者に、私は一通りの自己紹介を済ませた後、第一声「女性の捜査員の方が良ければ女性に代わりますよ。私では話しづらい事もあるでしょうから。」と彼女に問いかけた。

心の中では「女性の捜査員でお願いしますと言ってくれ。」とつぶやいていた。

その問いに、まだ顔色も悪く、悲惨な事件の影響からか、心なしか雰囲気陰しさの残る彼女が、私を見て答えてくれた言葉が「あなたでもいいです。」という一言だった。

おそらく「女性でお願いします。」という言葉が返ってくると思っていた私は、意外なその一言を彼女の口から聞いたとき、一瞬頭の中が真っ白になったが、次の瞬間、言葉に出来ない様々な熱い思いがこみ上げた。

彼女の優しさに気づいたのだ。

「女性の捜査員の方が良ければ・・・。」私が被害者支援という大役から逃げたい一心で放った安易な逃げの言葉であるが、彼女はそうとは思わず、私の立場を考えてくれたように思えた。

筆舌に尽くしがたい被害に遭った彼女の心に、いまだ他人を思いやる優しさが残っているのだと気付き、私は自分が恥ずかしく、心の底から情けない思いで一杯になると同時に、彼女の優しさに涙が出そうになるのを必死で堪えながら、今度はまっすぐに彼女と目を合わせ、精一杯の気持ちを込めて、「私で良ければ、被疑者を社会から長期隔離するために一緒に戦っていきましょう。途中で女性捜査員の方がいいと思ったら、必ず教えてください。直接私に言いづらければ、人づてでもかまいません。私が担当している限り、あなたやあなたの家族と一緒に全力で戦わしてください。」と言った。

その時の自分の顔が、こんな優しい被害者に対し、非道を尽くした被疑者を許せない気持ちと、この被害者の支えになりたいという気持ちで紅潮していたのを覚えている。

しかし、彼女は表情を崩すことなく、「お願いします。」と小さく一言答えただけだった。

「いつか彼女の本当の素顔が見てみたい。」こうして、私の初めての被害者支援が始まった。

彼女が負った重傷は、癒えるまで1か月程度の入院を要し、事情聴取を行うにしても、プライバシー保護の観点から、別室を借り受ける必要があった。

病院側と掛け合い、カンファレンス室を借り受け、そこで事情聴取や調書作成を行っていった。

もちろん、病院側が彼女を特別扱いすることで、心優しい彼女に変な気を遣わせないように、病院側に対する様々な配慮方をお願いし、自分自身も彼女をこれ以上傷つけないよう細部にまで気を配った。

事情聴取を続ける中で、彼女から被害状況の詳細を聴くにつれ、性別の違いを超えて、被疑者に対する身震いするほどの怒り、悔しさ、恐怖を感じた。また、私がショックだったのは、あろうことが彼女は被疑者の虚言に簡単に騙されて自宅の鍵を開けてしまったことに対する自責の念を感じていたことである。自分を責めなければならないことはただのひとかけらもないのにである。

少しでもこうした彼女の気持ちを検事や裁判官に分かって貰いたい。それが出来るのは自分だけだ。私は何度も同じ事を聞くことによって彼女に余計な負担を掛けたくないよう、それでいて彼女の気持ちに少しでも沿った調書になるように、真剣に彼女と向き合った。それと同時に私は、恐怖や悔しさで凍り付いてしまった彼女の心を少しでもほぐそうと、毎日毎日病院に通い続けた。

しかし、彼女は事件の聴取には応じるが、どこか無機質で、心をどこかに置き去っている感じられ、「結局おれは彼女の何を支援しているのか。こんなに辛い思いをしている彼女に何もしてやれないのか。」と思い始めて、病院の駐車場に着く度に、彼女に会って話を聞くことが苦しくなってきた。

そんなある日、私の子どもの運動会があった。もちろん私は、その日も彼女の入院する病院に行き、話を聴いていたが、昼休み、彼女が昼食を摂る間だけ、家族と弁当を食べる為に運動会へと向かったのだ。会場で子供の姿を探していると、一人の女性が私のそばへ駆け寄って来た。

彼女の母親であった。運動会には似つかわしくないスーツ姿が目にとまり、それが私であったことに気づいたらしい。

「今日も　　のところに行ってくれたのですか。」と声を掛けてきた。

私は、「はい。昼からも顔を出しますので安心してください。」と言ったところ、いきなり号泣しながら、「すみません。有り難うございます。すみません。お子さんの運動会にも出れずに。」と何度も頭を下げてくれたのだ。

そして「　　もいつも感謝しているようです。色々な話を聞いて貰って。」とも言ってくれたのだ。

私は、彼女に会って話を聞くのが苦しいと感じていた自分を、また恥じた。実際、何も支援出来ていなかったかもしれないが、彼女は、私に感謝してくれていたのだ。

彼女の優しさにまた助けられた気がした。

彼女の退院も近くなった頃、彼女は徐々にではあるが、私と話しをする際、笑顔を見せるようになってきていた。しかし、実際は、彼女を担当していた看護師さんによれば、夜になると不安になって眠れないようで睡眠薬を処方されていたのであった。私は、退院も近くなって来たのにどうしたのだろうと思い彼女を病院の屋上に誘って話を聞いたところ「退院して、あの家(被害にあった家)に帰るのが怖くて仕方ない。退院したくない。」と話し始めた。退院が近づき嬉しいものだろうと思っていた私は、事件が彼女の心に残した傷跡の大きさに改めて愕然とすると共に、ご両親と話し合っ、退院後しばらくの間親戚の家に住まわせてもらえるよう取りはかった。

退院の日、私も彼女に付き添い、病院の玄関まで送っていったが、その道すがらずいぶん明るさを取り戻した彼女が「いろいろお世話になりました。さんが担当するって最初に言ってくれたとき、年も若い男の人だからちょっと嫌だったけど、さんが担当で良かったです。本当にありがとうございました。」と言ってくれた。私は「やっぱり嫌やったんやろ。」と軽口をたたきながら彼女と笑いあった。

「さんで良かったです。」と言って貰ったあの事件から、もう5年が過ぎようとしている。

その後、彼女と連絡を取ることはなかったが、風の便りで彼女は明るさを取り戻して元気に暮らしていると聞いている。

私も、刑事係長として、部下を持つ身になり、検挙に勝る防犯なし。」を合い言葉に、「刑事は捕まえてなんぼだ。」が口癖の刑事になった。しかし、部下に必ず言う言葉には「刑事は被害者の為に、えーか、被害者の為に捕まえてなんぼだ。」と付け加えるようになった。

彼女を本当に支援できたかどうか今でも分からない。しかし、もしもまた被害者支援を担当することがあれば、今度は男も女も関係ない。罪種も関係ない。ただ全力で被害者を支援したいと思っている。

被害者の母

警察本部勤務 警部補 女性

ある朝、鉄道警察隊で勤務していた私あてに、1本の電話が入った。

1か月ほど前に取り扱った、電車内で痴漢被害に遭った女性の母親からであった。

「事件以降、一度も警察から連絡がないのですが、私の娘に痴漢をした犯人はどうなったのでしょうか。昨日、娘の携帯電話に知らない女性から留守電が入っていたのです。何か事件と関係があるのではないかと不安で不安で。」

母親の声は、口調こそ穏やかであったが、その奥に憤りが感じられた。そして、それを裏付けるかのように、こう付け加えた。

「娘は以前、ストーカー被害に遭っているのですが、その時の対応が悪く私は警察が信用出来ないのです。」

この事件は、私が被害者の最初の聴取を担当した。

被害者は、進学校に通う女子高校生。翌年の大学受験に向けて、予備校で午後10時まで勉強してから、自宅に帰宅する毎日を送っていた。

被害に遭ったのは、そんな帰宅途中の電車内でのことであった。

被害状況を聴取する際、彼女は、

「我慢しようと思ったけど、これまでもさんざん痴漢の被害に遭っていたので許せなかった。明日はテストがあるけど、どうしても犯人を捕まえたかった。」

と話し、徹夜覚悟で捜査に協力してくれた。同時に、

「うちは、父が単身赴任をしていて、母と私だけなのです。以前私が変な男につきまとわれたことがあり、母はとても神経をつかっているので心配をかけたくないのです。」

と、ひどく母親のことを心配していた。

彼女が心配したとおり、神経質になっている母親。私は、「本来ならば、被害者である娘を母親が支えてあげなければならないのになあ。」と考えたことを思い出し、心の中で「もっとしっかりしなさい。」と思いながらも、担当者に確認後、責任を持ってもう一度連絡をする旨説明して電話を切った。

その後、被害者の携帯電話の着信番号を調査したところ、この事件を担当している検察事務官からの電話であることが判明し、近日中に出す被疑者の処分結果について、通知方法を確認するために電話したということがわかったことから、私は、被害者の母親に電話をし、確認した結果についてなるべく平易な言葉を用いて説明し、近日中に母親から担当の検察事務官へ電話を入れて欲しい旨お願いをした。

すると、母親は明るい声で、

「安心しました。早速明日にでも電話してみます。」
と言って、電話を切った。この件はこれで終わり、やるべきことはやった、この時私はこう考えていた。

警察官として22年目を迎えた私は、いつの間にか、被害者自身よりナーバスになっている母親を見る度、「最近の母親は弱くなったものだ。母親がしっかりしないでどうするんだ。」と考えるようになっていた。今回の母親も、そう思わせる一人であった。

しかし、これを自分自身に置き換えてみたらどうであろう。電話を切った後、ふとそんな思いが頭をよぎった。

私には、現在高校生の1人息子がいる。

極めて健康体と思っていた私は、息子を妊娠中に流産しかかり、子宮頸部に先天性の病気があることがわかった。2度の手術と約4ヶ月の入院生活を経て、やっとの思いで息子を産むことが出来たが、医師からは、2人目を無事に産めるかどうかはわからないと言われた。2人目を授かったとしても流産してしまうのは悲しい。出産するために、再び長い入院生活となって職場に迷惑をかけるのも嫌だった。私は、子供はこの子だけで十分だと自分に言い聞かせた。

そんな思いがつまった子なので、職場では強気な私も、つい息子に余計な心配をしたり、涙ぐんだりしてしまうことがよくある。

私の息子が犯罪の被害に遭ったら・・・自分の身に置き換えると、これは人ごとではないと思えてきた。それが母親の心情である。

自分の息子や娘の被害を、まるで自分自身の痛みとして深く受け止めてしまう母親の愛。父親や他人から見ると行き過ぎなのではと思うくらい深い愛。

それを考えれば、少し神経質すぎるのではと思う被害者の母親にも、もっと思いやりのある対応をすることが必要なのは当然のことだ。私は明らかに、思いやりに欠けていた。被害者支援は既にきちんとやっているという驕りがあったことに気づき、これではいけないと思うようになった。

ふとあの母親のことを考えると、検察事務官とちゃんと話ができただろうかと心配になり、私の手が自然に電話へと伸びていた。

私の予感は的中した。母親は、検察事務官の話が難しく理解出来ず、機関銃のように説明されて、質問出来なかったと言った。

そこで私は、検察事務官に電話をして、母親との電話の内容を確認した。取り立てて難しい話ではなかったが、検察事務官が並べた専門用語は、専業主婦である母親にとってはわかりにくい言葉であったに違いない。

私は再度、被害者の母親に電話し、検察事務官の話をかみ砕いて説明したところ、母親は

「よかった。やっと意味がわかりました。安心しました。」
と言った。安堵の気持ちがちらまで伝わってくるような声だった。

このことで私を信用してくれたのか、母親は続けざま、なぜ最初に警察が信用できないと言ったのか、その理由を語り始めた。

中学生の時、電車通学をしていた娘は、駅で、ある中年の男に待ち伏せされ

るようになった。そのうち、男は自宅近くの商店街や自宅の最寄駅にも現れるようになった。父親は単身赴任で不在のため母と娘だけの生活であり、このようなストーカー行為は怖くて仕方なかった。夜も眠れないほど不安になり、意を決して警察署へ相談に行った。警察の担当者は「相手呼び出して厳しく警告しましょう。」と言ってくれたが、ストーカー行為が高じ、殺人事件等に発展した事件の報道等を見て、報復などがとても怖かったため、「警告するのはやめてほしい。他に何か方法はないのか。」と懇願した。しかし、担当者は警告が一番の方法だと言うのみで十分な説明をせず、母親には警告がなぜ一番の方法なのか理解出来なかった。

この担当者は、決してこの件を軽んじた訳ではないと思う。真摯に対応していたに違いない。しかし、残念ながら、その思いは母親には伝わらなかった。

最初のボタンの掛け違いから、他にもいろいろ理不尽に感じるところが出てきてしまい、警察とはいつまでも平行線・・・結局、母親は警察に頼るのをやめた。娘を守るのは自分しかいない。娘に電車の時間や車両を変えさせ、地元の駅や商店街に協力を求めた。タクシー会社にも依頼し、最寄駅から自宅までタクシーで帰宅させることにした。母親には、「私がこんなに頑張っているのに、警察は頼りにならない。」という不満ばかりが募り、次第に警察を信用出来なくなっていった。

この話を聞き、私は自分にも高校生の子供がいることを伝え、一人の母親として子供の被害は自分にとってもショックなことだと同調した。そして、ストーカー事案の流れについて説明し、電車と一緒に乗車して警戒することも出来ると申し出た。

母親は、

「一緒に乗車していただけるのは安心するし、嬉しい。そんな方法もあるんですね。」

と喜んだが、最近娘はその男と遭遇することもなく、今は受験に集中させてやりたいと娘を気遣った。

そして、母親は自分のわだかまりを私に話すことによって、心のつかえが取れたようだとも言ってくれた。

翌日、母親から私あてに再度電話がかかってきた。

「昨日、お巡りさんに聞いたことを娘にも話したのです。私も娘もとても安心しました。電車と一緒に乗って下さるといのがとても嬉しくて。もっと早くに相談すればよかったねと。昨晩は私も娘も久しぶりによく寝ることが出来ました。」

私は、2人の自宅の警戒もしていないし、実際に一緒に乗車しての警戒もしていない。でも、こんなに喜んでくれて、こんなに感謝されて、私の方が申し訳ないような気がした。それと同時に、警察官の言葉の重みを改めて実感した。

「娘の受験が終わったら、今度お手紙を書きます。私も娘もお礼のお手紙を書きたい気持ちでいっぱいです。」

母親の声は、最初に話した時とは別人のようだった。

犯罪によって、被害者だけでなく、その家族も心に深い傷を負う。そして、事件のショックで傷ついた家族の心も、私達警察官のちょっとした言葉や相手の立場に立った思いやりのある対応で、少しは和らげることが出来るのである。

長年の警察官人生で既にわかっていたはずのこと。

しかし、気が緩んでいた。この件で、そのことを思い知った。

ここでもう一度、初心に戻って思い直そう。

そして、警察官であるとともに、一人の母親であることを忘れずに、仕事に生かしていこう。今は心の底からそう思っている。

初めての被害者支援

警察署 地域課 巡査長 女性

警察学校卒業後初めての赴任先は、女性警察官が私を含めて2人だけの小規模署でした。

私が刑事志望だったこともあり、性犯罪等が発生したら間違いなく被害者支援は私に回ってくるだろうと思っていました。

赴任して2年目のある休日の昼下がり、携帯電話が鳴り「女の子が強姦されたと届けに来てる、話聞きに来てくれ」との非常招集がかかりました。

被害者支援の教養は受けていたものの、現実に対応するとなると正直不安でした。

署に向かう道中、私は「どういう風に被害者に接しようか」と考えました。

不安な気持ちを押し隠し、被害者に「この私にまかせておいて」と大見栄を切ってみせるのか、それとも家族や親友のつもりで親身になって話を聞くのか...

基本事項などはあらかじめ頭に叩き込んでおくべきなのに、それが出来ない分を言葉や態度でカバーしようなどと、今から思うとなんと生意気で横着だったのでしょう。

署に着いて先ず、被害者支援のマニュアルにざっと目を通した後、被害者に会うより先に他の捜査員から概要を聞きました。

すると、虚偽申告の可能性があるので、もう一度よく話を聞いて欲しいとのことでした。

当時被害者は、彼氏との学生らしくない交際について学校で指導を受け、それに従わなかったので、学校を退学になりそうで、加えてその日は、家族にも交際を反対され、家を飛び出してきたということでした。

私は、その話を聞いて、それでも先ずはセオリーに従って白紙で聞こうと自らを律しました。

このときはまだ「基本に忠実に」を肝に銘じていたからです。

最初に透視鏡から見た彼女は顔をしっかりと上に上げ、目を見据えていました。

気丈に振る舞おうとしているのが見て取れました。

ところが彼女が私を見た瞬間、少し笑みを浮かべてくれて、私も思わず微笑んでしまいました。

被害者より先に緊張がほぐれた一瞬でした。

そして自然と

「大変やったね、大丈夫」

という言葉かけることができ、それを聞いた彼女はさっきよりも更に親しげに「はい」と優しく答えてくれたものの、みるみる目から涙があふれ出てきたのです。

彼女はそれまで男性捜査員にばかり囲まれていたので、この時の彼女にとって、目の前に現れた女性の私は、正に地獄で仏だったに違いありません。

そこまではいい感じの滑り出しだったのですが、その後産婦人科へ同行し、その結果から周囲に「やっぱり虚偽申告か。」という雰囲気は漂いました。

そして、あろうことか私までも「嘘か、よし白状さそう」などと思い始めてしまったのです。

先の一瞬の盛り上がりもどこへやら、彼女にすれば仏が鬼に変わってしまったも同然でした。

事情聴取を進めるうち、彼女がみるみる心を閉ざしていくのが分かりました。

そしてどんどん口数が少なくなってしまい、それは私が透視鏡を通して初めて見た時の彼女でした。

言葉や態度には出していないつもりでしたが、彼女は私に疑われていることに気づいたのです。

今から思えば、彼女に初めて会った時、彼女の方から私に微笑んでくれたのは、私が先入観を持たず白紙で臨もうと自らを律し、それが表情に表れていたからに違いありません。

ところが、そんな私が医師や他の捜査員の意見に流され、先入観の塊に豹変してしまいました。

それを見抜いた彼女は、最初の頃のように頑なな態度に戻っていったのです。

事情聴取を一通り終え、聞き込みなど客観的状況との符合などから、彼女の話が事実であることが徐々に分かってきました。

私は、彼女を疑ったことを心から反省し、彼女に向き直って精一杯支援にあたりました。

けれども、あまりの失敗の大きさに正直に言葉に出して謝ることはできませんでした。

このころ彼女に「大丈夫？」と聞いても彼女は「大丈夫です。」と冷やかに答えるだけでした。

捜査は順調に進み、後日犯人を検挙できました。

加害者には、性犯罪の前科があり、刑務所を出て半年しか経っていないのに、再び性犯罪を犯したのです。

捜査の結果、彼女の説明通りの犯行事実が裏付けられ、加害者は有罪になりました。

その間、自責の念にかられた私は誠心誠意彼女の支援に当たり、支援制度を調べては彼女に教示したり、検察庁での事情聴取に付き添って送り迎えをしたり、近況を聞くために連絡を取ったりしました。

しかし、彼女は最後まで私を頼ってくれることはありませんでした。

現在も私は被害者支援要員として性犯罪被害者の支援を行っています。

今でも完璧な被害者支援が出来ているとは思っていませんが、私を頼って色々相談をしてきてくれる被害者もいます。

他の捜査員の前では気を張っていても、二人になるとぼろぼろと涙をこぼし、話をしてくれるという体験もしました。

女性警察官は女性というだけで物腰柔らかかでソフトな印象を持ってもらえるという武器がありますが、それだけで被害者支援員が務まるわけではありません。

大切なのはプロとしての知識、人格そして少々のことではぐらついたりしない「被害者を思う心」です。

私が被害者支援に当たるとき、六戒として私なりに気をつけていることがあります。

- ・ 予備知識は不可欠だが、先入観は失敗の元
- ・ 私と違って被害者にとっては一生に一度の悪夢
- ・ 落ち度のある被害者などいない。隙をあさる犯人がいるだけ
- ・ 被害者は私の身内だと思え
- ・ 私が失敗したら喜ぶのは犯人
- ・ 最終目標は頼ってもらうこと

被害者支援の経験を重ねる度、その傷の深さをより一層感じ取れるようになり、それと同時に初めて携わった被害者支援で被害者を信じ切れず傷つけてしまったことを思い出し、いたたまれない気持ちになります。

被害者の無念を晴らすために全力を尽くしているつもりが、被害者の心の傷を広げてしまうことになるのはあるまじきことです。

折角犯人を突き止め、有罪にできて、肝心の被害者に「やっぱり警察に言わなければよかった」と思われてしまえばそれで全てが失敗です。

被害者に心から「ありがとう」と言って貰えるのは、被害者支援がきちんとなされた時だけなのです。

ですから私は、被害者支援は私たち警察官に課せられた重大な使命であると思っています。